

混浴プロジェクト

混浴の未来を模索する

十和田八幡平国立公園の温泉の特色として、混浴風呂が多いことが挙げられます。この国立公園の元来の来訪者、つまり農閑期に家族連れで疲れを癒しに来ていた地元の農家の人々は、男女が入り混じる満員の湯船に入っていくのにあまり抵抗感がありませんでした。現代の人々は、一人での入浴や男女別浴が普通です。ですから、見ず知らずの人、ましてや見知らぬ異性との入浴に戸惑うことがあります。彼らはこの地域の湯治場の文化や、なぜその結果としてこの地域で混浴が続いているのかをよく知りません。このように入浴についての異なる考え方が、十和田八幡平の古くからの混浴文化にとって、存続上の課題となっています。

環境省が 2021 年 11 月に「混浴プロジェクト」を発足したのは、この課題に対応するためでした。プロジェクトの目的は十和田八幡平の温泉旅館経営者やその他の関係者とともに、混浴風呂が現在直面している問題を分析し、解決することによって、混浴風呂を重要な要素とするこの地域の湯治文化を保全することです。

万人に受け入れられるような画一的な解決策は存在しません。物怖じしやすい入浴者にとっては、大浴場や露天の混浴よりも、小さな風呂や屋内での混浴の方が不安です。お湯が透明な風呂は、乳白色のお湯の風呂よりも落ち着かない気持ちになります。異なる風呂には、異なる解決策が必要

な場合があります。

混浴プロジェクト以前にも、十和田八幡平国立公園の全ての宿では、混浴風呂の入り口を覆って女性がすでに首まで安全に湯に浸かった状態で共用スペースに入れるようにするなど、女性客がより安心して入浴できるような工夫がなされていました。

もちろん、利用客全員に着衣で入浴してもらうのが最もシンプルな解決策ですが、その案にも反発があります。多くの利用者は何かを身につけさせられるのを望みません；アンケートによると、利用客は裸での入浴が自然だと強く感じています。また、客が自前の水着を持参することに関連する衛生上の問題もあります。

その一方で、風呂で身体を隠すという観念は、日本の文化にとってまったく異質なものではありません。昔の写真を見ると、女性が薄手の衣をまとい、身体を擦ってもらうために雇った男性に目隠しをさせていた様子が見られます。日本語には、混浴風呂で着る衣類を指す「湯あみ着」という言葉さえあります。

身体を隠すことが集客につながる？

それでは、混浴プロジェクトはこれまでにどのような具体的なステップを踏んできたのでしょうか。プロジェクトの一年目、環境省は、十和田八幡平国立公園で最も大きい温泉宿である酸ヶ湯温泉を理想的な試験場として選びました；この温泉の最大の目玉は、その巨大な屋内混浴風呂だからです。

環境省との協議に基づき、酸ヶ湯温泉は、特定の時間帯に男女を問わず全ての利用客が湯あみ着を着用しなくてはならない、特別な湯あみ着の日を導入しました。環境省が行った調査によると、この試みは好ましい結果をもたらしました。女性やカップルの客がたくさん訪れはじめ、かつて風呂が気取らない農民たちであふれていた頃のような賑やかな雰囲気が生まれました。環境省は、酸ヶ湯での湯あみ着の日の試行を2年目も継続するとともに、湯あみ着の着用以外で混浴をより身近なものにするための方法を模索し始めました。3年目からは、湯治を取り巻く文化の価値と、混浴を守ることの重要性について、一般の人々への啓蒙活動も行っています。